



うれしの特別支援学校の全景。完全バリアフリー

方はこうだとばかりのお手本を示したりしてお兄さんお姉さんぶりを発揮しています。実に賑やかな登校風景から、学校の1日が始まるのです。

特別支援教育は障害のある子どもたちの自立や社会参加に向けて、日常的な生活や学習をする上で困難なことを改善し

克服していくために、適切な指導や必要な支援を行っていくものとされています。ですから、小・中・高の発達段階に応じた授業や作業学習等には実に素晴らしい工夫が見られます。担当教師は、子どもたち一人ひとりの障害の特性や能力に合った教材や補助具などを作成していますが、その出来映えとアイデアの見事さ、個々の子どもに応じた指導・支援の在り方は本当に感心してしまいました。

現在、多くの特別支援学校が抱える課題の一つに、高等部卒業生のうち企業等への一般就職者数をどのようにして増やしていくかがあげられますが、本校では、キャリア教育を徹底して取り組むことでその解決を図ろうとしています。人間関係をうまく形成することが難しい子どもたちのコミュニケーション能力を高め、勤労観・職業観を育み、社会的・職業的自立を可能にし、子どもたちのそれぞれの

夢が実現できるよう、小学部・中学部・高等部の12年間の一貫したキャリア教育を研究・実践しているところです。中でも、高等部では卒業後の進路を意識した作業学習や職場実習に多くの時間を使っています。生徒の主体性と可能性を重んじながら、地元の全国的に有名な嬉野温泉のホテルや大型スーパーなどでの定期的職場実習、いわゆるデュアルシステムを行っています。週に1度ですが、産業現場で1日中働くことで、就労の技術や態度を身につけ、就労の意欲や意義を高め、一般就職へとつなげることを目的としています。子どもたちの能力や技術の向上は容易いことではありませんが、粘り強くこつこつと努力を積み重ねることです。それぞれの夢の実現を果たしてほしいと心から願っているところです。

私にとって、教職生活の最後に特別支援学校に勤務できたことは、大変よかったですと思っています。薄れかけていた「教育の原点」にしっかりと立ち返ることができ、そして、障害のある人もない人もともに幸せに生きて行ける「共生社会」の形成に向けてもう一踏ん張りしなければならぬと思ったからであります。

学校教育の現場から



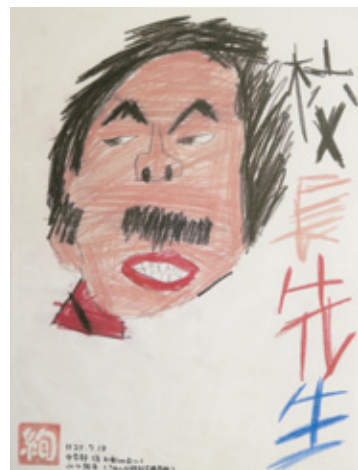
村山 孝 TAKASHI MURAYAMA



佐賀県立うれしの特別支援学校校長
地理歴史科

- | | |
|----------------------------|------------------------|
| 1954年 生まれ | |
| 1978年 明治大学文学部史学地理学科地理学専攻卒業 | 2003年 佐賀県立佐賀北高校教頭 |
| 1980年 佐賀県立伊万里養護学校教諭 | 2006年 佐賀県立鹿島実業高校教頭 |
| 1984年 佐賀県立小城高校教諭 | 2008年 佐賀県立厳木高校教頭 |
| 1985年 佐賀県立厳木高校教諭 | 2010年 佐賀県立うれしの特別支援学校校長 |
| 1991年 佐賀県立唐津西高校教諭 | 現在 |
| 2000年 佐賀県教育委員会指導主事 | |

援学校に赴任してきましたが、それまでの勤務はほとんどが高等学校でしたので特別支援教育の基礎基本から学ぶことになり大変苦労したものでした。しかし、特別支援学校の子どものためには学ぶことが大変多く、学校教育の意義や教師の使命等について改めて考え直すことができたとように思います。



中学部の自閉症の男の子が描いてくれました。校長室に飾っています。私の宝物です

障害のある子どもたちの自立と社会参加、そして「共生社会」の形成を目指して

私の勤める「佐賀県立うれしの特別支援学校」は、季節の移ろいを色濃く感じさせる田園風景が広がり、実り豊かな里山を背にした自然いっぱい環境にあります。知的障害教育と肢体不自由教育の併置校で、小学部、中学部、高等部合わせて170名の子どもたちが学んでいます。佐賀県の南部地域を通学区とし、通学困難な子どもたちのための寄宿舎もあり、開校して今年で8年目を迎えます。私は、4年前に校長としてこの特別支援学校に赴任してきましたが、

特別支援学校の1日は、登校してくる子どもたちの明るい挨拶が始まります。子どもたちの元気の良い挨拶と体いっぱい使ったお辞儀に私も元気が出てきます。小学部低学年の子どもたちの中にはお母さんに手を引かれ、重いランドセルを引きずりながら、玄関で待ち受ける担任の先生におうちの出来事を明るく一所懸命お話する子もいます。また、寄宿舎の高等部の生徒は小学部や中学部の子どもたちの手を引いて、先生への挨拶の仕